

藝園草牧

夕張部長沼町字幌内一〇六六
雪印種苗株式會社
中央研究農場



創刊號

雪印種苗株式會社

發刊の辭

雪印種苗株式会社々長 青 山 永

われわれ八千数百万の日本人は、二千幾百年の間、米作農業によつて繁栄した。いうまでもなく、米ほど反当生産熱量の高い食糧はない。国土が狭く人口の稠密なるわが国にはもつてこいの作物であり、米の尊重せられ来たつた所以も亦ここにあるのである。したがつて、米作については一応世界第一と言ひ得るであらう。

しかるに、われわれは今、重大なる食糧の不足に直面した。土地の生産力を増大するために、大きく耕地の改良事業が推進せられ、また新規開墾の事業も計画せられ、その他あらゆる面に亘つて増産の努力が払われつつある。しかしそのいづれもが旧来の米麦本位、穀菽農業の域を脱せず、限られたる土地の生産力の増大——量的にも、また質的にも——のための根本問題を衝いていないうらみがある。

われわれは人生をできるだけ楽しいものにした。これは人間の本能である。また、でき得る限り有意義に、そして高いものにしたと思ふ。穀菽農業を転換して、有畜農業に行詰り打開の途を求めるといふことは、われらの知性の然らしむるところであり、途を一度ここに求めるならば、豁然として大面積の農地が展開し来り、決して国土の狭小を嘆くを要しない。

有畜農業における牧草その他の飼料作物……すなわち草の重要性は、決して家畜そのものの重要性に劣るものではない、もし有畜農業に対する期待の最重点を、地力の増進、生産の高度化に求めんとするならば、飼料作物の栽培こそその核心をなすものであり、これを軽視した家畜の導入は、往々にして作物に代るに家畜を以て地力を搾取疲弊せしむる恐れあるは、多くの実例の示すところである。言葉を変えて言へば、家畜の真価は、草の合理的栽培と有機的に相結合することにより、初めて發揮せられるのであつて、この草……飼料作物なきところには、家畜なしと言ふも敢えて過言でなく、今日草地農業あるいは草地農法なる言葉が用いらるるに至つたことは、決して偶然ではない。

しかるに、古来「草」と言へば、直ちに望ましからざる雑草を連想せられたものであるが、米麦の程度とは言わなまでも、もう少しこの有用なる草の問題を正しく認識し、その研究改良に努力が払われていたならば、一般の有畜農業に対する良識も養われ、當農の実態も今日とは大いにその趣を異にするものがあつたことと思われる。

さらに、わが國の農業に竿頭一步を進むべきは、園芸の普及である。専門の経営は暫く措き、いづれの農家も、それぞれ教本の果樹と、たとえ教坪であつても、花卉類を栽培するようになつたならばどうであらう。重労働の農家の忍苦の生活が、農法の研究転換によつて改善され、高度化され、それに果実・花卉の栽培が伴なうに至つたならば、農家の生活には滋味が溢れ、情操が高まり、今日とは格段の向上を来すであらう。これは決して不可能なことではないと信ずる。

わが社は茲に同志と共に力を合わせ、有畜農業普及促進のために、牧草その他の飼料作物——すなわち草の栽培について有効適切な研究を進め、併せて園芸の普及発達を図らんがために、学界、先覚の士と、一般農家各位との紐帯となり血管となり、いささか微力を致したく本誌の發刊を企図した次第である。この小誌が何等かの貢献をなし、お役に立ち得るならば、これに増したる喜びはない。ここに大方各位の御指導と御鞭撻を希い、所期の目的を達成せんことを念願してやまない次第である。

牧草と園芸 創刊號

目次

- ◇表紙題字……………北海道園藝會々頭 星野勇三氏
- ◇表紙写真……………北海道札幌近郊・牧場風景
- ◇發刊の辭……………雪印種苗株式会社々長 青 山 永
- ◇牧草と園芸の發刊を祝して……………北海道大學々長 島 善 鄰
- ◇牧草と園芸に寄せて……………北海道農務部長 大 塩 糺
- ◇牧草と園芸に叙す……………北海道園藝會々頭 星野勇三
- ◇牛を作る牧草……………宇野宮 勤
- ◇学校環境の美化と植樹……………水島ヒサ
- ◇世界に誇る日本の牧草……………倉田益二郎
- ツルマメとその優良品種……………沢田英吉
- ◇炉辺閑話……………石田文三郎
- ◇薔薇の栽培と鑑賞……………雪印藤之沢育種場
- ◇菠薐草の優良品種バイキング……………江原 薫
- ◇スーダン・グラス(一萬貫牧草の栽培)……………
- ◇ビニール使用の育苗について……………雪印千葉育種場
- 雪たね同友会便り……………

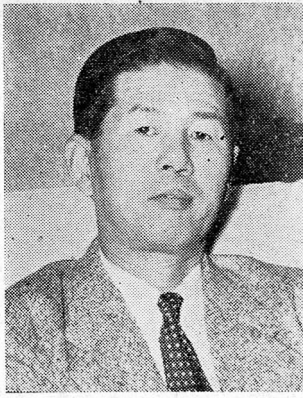


北海道大学学長

島 善 鄰

牧草と園藝の發刊を祝して

農業はどういうように経営すればよいか、という問に対して、私は「文化的な良いくろしができるように営むに限る」と答えたい。農業も立派な一つの企業であるから、年々収入を多くすること、労力を合理的に活用することも勿論大切であるが、何といつても、家



北海道農務部長

大 塩 糺

牧草と園藝に寄せて

文化は北方より生まれると言われているが、開拓当初米の稔らなかつた北海道が、品種

族の全員が生活を楽しむことを最終の目的とすべきであろう。

農業は自然条件と経済条件によつて水田経営、畑穀栽培経営、畜産、園芸等その主体となる経営型態は色々になるが、いかなる経営においても生活を楽しむ上に家畜と園芸が程良く組合わされることが絶対必要である。

このたび雪印種苗株式会社が月刊雑誌「牧草と園芸」を刊行するということを聞いて、農民各位の有畜経営と園芸のため、より良き友になるよう切に祈りたい。

「たね」は農業のものである。わが国の農産種苗のうちで、米麦雑穀は国または都道府県の試験機関に依つて改良並びに増殖普及が行われているが、牧草・飼料・園芸作物等は殆ど民間が取扱つている実態である。しかして、この民間の種苗界を展望するときに、そのたねを作る者、買つて使うものが、果して種苗の本質と特性に真剣に心を配つていようかと思ふと疑問を持たされる。

戦後食糧問題の解決が国民八千万の頭上へのしかかつてこの秋に、雑誌「牧草と園芸」が、たねを作る者、あるいは使う者の相互理解を深めるだけに止まらず、わが国農業の将来に一つの燈火を点する気概を以て鋭意研鑽を重ねられると共に、不断の努力を捧げられんことを切望する。

改良によつて三百数十万石の生産を見るに至り、温床苗代の研究と普及は北方の稲作を安定せしめて、従前のような凶作不作も見られぬようになった。研究、工夫、改善は無限であつて、文化は文化を生み停るところを知らないものである。

北海道の開拓は、明治の初年クラーク先生を始め、ケブロン氏、ダン氏その他米人先覚者の指導によつて種苗、種畜、農機具が導入され、甜菜糖業、亜麻纖維工業、ビール醸造業等が、わが国最初の農村工業として登場したものであり、都市計画、建築様式等百般の施設においても、米国に学ぶところが尠くなかつた。かくして開拓七十年の歴史を有する北海道が、わが国の発展に寄与したところは決して尠くないが、終戦後わが国人口並びに食糧問題の解決上、北海道の使命は一段と強化された。私はわが国土即ち四つの島の農業生産力の増大を図り、農家生活の向上を期するに米国より何を学ぶべきかを数カ月に亘り見聞したのであるが、私の第一に心をうたれたものは、米国の農業は経営の大小は別として、農家生活をエンジョイしながら能率的な作業を続け、常に新しきを求めて躍進又躍

進していることである。

省みて、わが国農業の現状を見るとときに、先ず以て国内食糧の自給を確立すると共に、農家生活の安定向上を図らなければならぬものと痛感する。これがためには、機械力を用いて土地の利用面積の拡大と深耕による土地の立体的利用を徹底化し、且つ農作業を効率化して、時間を文化面に振り向ける工夫をすべきであらう。

つぎには食生活の改善である。すなわち澱粉食糧の偏重を改めて、動物性食品の摂取を増加することの必要なるは、欧米各国の生活を知るものひとしく認めるところである。この食生活の面から、わが国農業経営の型態を考えるとときに、無畜農家を無くし、経営規模、立地条件に応じた有畜経営に改めて、果樹、蔬菜、花卉等の園芸を加味することが必要となつてくる。



北海道園芸会々々頭

星野勇三

牧草と園藝に叙す

曩に事業の大拡張を行い、その専門である飼料・緑肥作物種苗のほか、広く園芸作物種苗の生産販売をも兼ねるところの、いわゆる綜合種苗業の経営へと発展した雪印種苗会社は、今回また新たに、「牧草と園芸」なる月刊雑誌を発行することになり、その発刊の門出に饒する一文を老生に需められた。依つて左記拙文を綴り、その請に應ずることと致す次第である。

本誌の発刊に就き会社は、「日に月に進歩する酪農並に園芸界の新しい技術と経営の在り

世界的に見て、わが国ほど果実、蔬菜、花と四季様々の変化を楽しめる国はないであらう。ここにおいて、各地の特産が発達し、お互に余慮を分ち合い、生活を豊かに美しくするように努力することは勿論、農家各戸は農地の内外、宅地の環境を良くして、楽しい農村生活を持ちたいものである。

終戦後、国としても道としても、酪農経営の普及と園芸の復興に種々の施策を構じているが、その基礎となる牧草類の研究と園芸種苗の改良については、民間の研究努力に俟つものが極めて大なるものがある。この折に、雪印種苗株式会社が月刊雑誌「牧草と園芸」を発刊して、農業に携わる者と固く手を結び、よりよい種苗の生産と普及を企図したことは、時宜を得たものと思うが、酪農家、園芸家、一般農家の良友として益々健全に発展し、わが国農業の進展興隆に貢献することを希望してやまない。

方、又は新しい優良種苗の解説等を、斯界の権威者並びに篤農家に発表してもらおう。」と言っているが、牧草の知識を普及し、その栽培を奨め以て畜産の振興をはかり、農村経済の安定を期するは、畜産においてとかく立ち後れているわが国として、極めて大切であり、また園芸技術を向上せしめて、栽培上一定地積より最も多くの生産を挙げ得るといふ園芸の特色を発揮せしめ、由つて以て農村経済の確立を期することも、土地の狭きわが国においては特に重要である。これらの点より考えて来る時、私は牧草と園芸誌発刊の意義極めて深きものあるを感ずると共に、会社今後の努力に期待するところ甚だ大なるもの無きを得ざるのである。而して尙、私は、園芸に關係深き身として、北海道の農村における家庭園芸の普及ということにつき、特別の関心が払われることを希望したのである。本道の農村生活が一般に殺風景であり、無趣味であることは定評のあるところである。しかるに、今もし農村の各家庭において、香味高き果樹が数本植えられ、優秀珍重の蔬菜類が栽培せられ、美麗なる草花が庭先を飾る、ということになつたなら、生活に慰安と趣味が与えられ、したがつて生活に豊かさを増し、潤いを生ずる次第であつて、ここに生活は安定を来し、本道農村の通弊ともいわれる農民の移動や離農の多きことも防止せらるることと信ぜらるるのである。農村における家庭園芸と言へば、一見甚だ奇異に感ずる人もあるかも知れぬが、その重要性においては、都会におけるそれよりも大なるものがある。特に本道の農村においては然りである。広く世間の留意を望んで止まぬ。